

パイデイア（そのXIX）

——トウキユデイデス…政治哲学者としての——

トウキユデイデスは、ギリシアの歴史家として、最初の人物^①ではない。ゆえに、そうしたかれを理解しようとするれば、先行する人びとの中で歴史感覚がどれほど発展していたか、を明らかにしないわけにはいかない。言うまでもなく、かれ以前の歴史家で、かれと肩を並べるような人物は目にされず、かれ以後の歴史家で、かれが踏み出した^②線^③に添ったような人物も目にされなかった。かれ以後の歴史家は、それぞれに、みずからの時代の知的流行から様式も基準も引き出していたからである。もつとも、かれ以前の歴史家となら、接点^④が認められないわけでもない。一番古い歴史のタイプは、自然科学の勃興期にイオニアの地で生み出された。歴史を意味するギリシア語は「ヒストリエ」であって、ここにも、この言葉の、イオニア起源^⑤は仄めかされているにちがいない。と同時に、この言葉から、自然の探求^⑥という元々の意味が消え去ることもなかった。そのような「探求（ヒストリエ）」の対象を自然の全体からある特定分野に、つまりは、人の住まう土地^⑦に移したのは、われわれの知るかぎり、ヘカタイオスが最初であった。この人物は、最初の偉大な自然科学者たちと同じく、イオニアの文化的中心であったミレトスの出で、かれ以前、人の住まう土地は、ただ単に、コスモス（世界の一部）^⑧としかみなされず、そうしたコスモスの表面（＝人の住まう土地）

の性格や構造も、単に、一般用語で記述されるにすぎなかった。かれは、世界の国々とそこに住む人びとを精力的に紹介したが、その説明は——たとえ神話の系図的研究と知的批判を混在させていたにせよ——経験的知識と論理的仮説を見事に混ぜ合わせて、ギリシア思想の発展過程にうまく収まり、分かりよいものとなっている。それは、古い叙事詩的伝統を批判的・合理的に記述する重要な行程にはかならず、歴史の出現する基本的な前提条件でもあった。というのも歴史は、同じ批判原理を奉じつつ、知られた土地に暮らす住民たちの伝統的情報をできるかぎり集めて、探究的考察（ヒストリエ）を介して存分に吟味したからである。

このような一歩は、ヘロドトスによって踏み出された。かれは、ヘカタイオスに従って地理学と民族学を一つにまとめたが、主たる関心はあくまでも、人間そのもの^⑨にあった。この人物は、近東、エジプト、小アジア、ギリシアなどの、当時のあまねく文明世界に隈なく足を運びながら、訪れる先々で、まことに奇妙な風習や、ギリシアよりも古い国々の驚くべき知恵の類いを調査してどっさり記録した。さらには、そこで目にした宮殿や神殿がいかによびやかであるかも記述したし、王族や多くの興味ある重要人物たちの歩んだ一部始終を物語って、そこに、神々の力やはない人間の運命の盛衰がどのような影を落としているか、も

G・ハイエツト
村島義彦 訳

しつかり紹介した。このような事象のメドレーは、古代の壁掛けと同じく実に複雑に入り組んでいたが、ある大きな中心テーマに基礎づけられて一つにまとまっていた。ほかでもない、東方と西方の争い——ギリシア人とその隣国のクROIイソスに統治されたリュディア王国の争いという、歴史的に確証された最初の戦闘からペルシア人のギリシア侵攻にいたる——がそれである。ヘロドトスは、物語を告げるというホメロスの技法の喜びを満喫しながら、後代のために、ギリシア人とバルバROIイ(異国人)にみる輝かしい行為の数々を記録した。かれの作品の目ざすところは——冒頭の文にも語られているように——これを措いてない。しかもかれは、これらを書き記すにあたって、散文体を用いた。散文体は、一見したところ、まるで気取らない素朴そのものに映ったけれども、同時代の人びとには、叙事詩に用いられる韻文体が父親世代に親しまれたように、しつかりと親しまれるにちがいない、と考えられたからである。かれの仕事は、科学的探求とソフィスト的論理の時代にあつて、ヘカタイオスの知的批判を介して打ち倒された叙事詩的伝統を何とか復活させることにあつた。あるいはむしろ、古い叙事詩の根から新たに生い育つたのが、かれの仕事にほかならない。あくまでも冷静で、感情に押し流されない、ひたすら経験に立脚した科学者の姿勢に、有名な人への賛美に喜びを覚える吟遊詩人の心情を混ぜ合わせながら、かれは、おのれの目にし耳にしたすべてを用いて、個々人や国家を超えた「運命の力」を描き出した。かれの歴史には、小アジアのギリシア人に特有の、豊かではあるが古風で、しかも高度に錯綜した文明が体现されていた。小アジアのギリシア人は、サラミスとプラタイアでの祖国の予期せざる勝利によって、英雄時代から数世紀のち、異国の君主への服属から数十年をへて今一度、歴史の本流へと引き戻されたが、その際も、長年にわたって磨き上げてきた「あきらめを基調とした懷疑」をいささかも失わ

なかつた。

トゥキュデイデスの手で生み出されたのは「政治史」にほかならない。ヘロドトスの作品の圧巻はペルシア戦争であつたけれども、当人はしかし「政治家」ではなかつた。かれは、多くの他の人たちと同じく、あくまでも「非政治的な精神」で政治史をまとめたからである。生まれ育つたハリカルナッソスという静かな町で、かれは、政治生活をほとんど目にしなかつた。そして、激しい変動に彩られた戦後のアテナイではじめてこれに出会つたときも、直接には参加せず、あくまでも褒め称える聴衆として、単に外側から眺めているにすぎなかつた。これに対してトゥキュデイデスは、ペリクレス時代のアテナイの正銘の市民であつて、ここでのアテナイの生命の元は「政治活動」にあつた。古くはアテナイ人と同胞のイオニア人が、その有無で区分された「健全な政治感覚」は、ソロンの手で活動の場を与えられ、結果として前六世紀の社会動乱が勃発したけれども、これ以後、アテナイの指導的市民はすべからず政治に参与して、ゆえにアテナイ人は、あまたの政治経験とあまたの明確な政治観念を手に入れた。政治の働きは、当初、社会の現状に向けた若干の鋭い観察に——偉大なアッティカの詩人たちに仄めかされて——顔を覗かせたにすぎなかつたが、ペルシアの侵攻中は、アテナイの人びと——つい最近、ペイシストラトスの僭主支配から解放された——の結束と意思決定にも登場して、サラミスの海戦以後、テミストクレスの帝国主義政策がその翼を広げるや、小さな国は、ついに「アテナイ帝国」となつた。

政治的な思索と意思が驚くばかりに結集して、ついには帝国を生み出したのだが、トゥキュデイデスの歴史も、そのような結集の知的産物にほかならない。ヘロドトスは、当時の人びとに知られていた世界の津々浦々にまで足を運んで、そこで目にされた国々、人びと、神々を冷静に

観察し、膨大な百科全書型の知識を手にしたが、これに比べると、トゥキユデイスの精神的地平は、まことに狭く限定されていたといわなければいかなない。かれは、ギリシアのポリスの影響圏をまるで踏み越えなかったからである。扱われる題目も、それゆえ範圍的にはるかに狭かったが、そこにはしかし、いっそう深い問題が——はるかに激しく体験され、はるかに深く理解されて——ぎっしりと詰まっていた。そのような問題の中心に位置したのは、国家の本性で、このテーマは、当時のアテナイでまとめられた書物にほぼ例外なく登場したといつてよい。ならば、こうした問題の研究が、なぜあえて歴史の見解を促すにいたつたのだろうか——この点を理解するのは、そう容易いわけではない。ヘロドトスの描く国々の歴史なら、とうてい、誰かを励まして政治史など纏めさせなかったにちがいない。しかるに、ひたすら脇目も振らず、現在に意識を集中していたアテナイは、唐突に危機に直面し、その中で、真面目な政治思想家の面々は、歴史意識——今日では新しい意味と異なつた中身を具えている——を發達させないわけにはいかなかった。かれらは実に、国家の發展によつて導かれた危機の、歴史の必然性を見つけ出すように……と迫られたのだつた。トゥキユデイスの歴史に映し出された知的革命の真の本質は、これを措いてない。すなわち、歴史的著作は、政治的著作にならなかつたが、政治的思索は、歴史的思索になつたのである。

これが事実とするなら、トゥキユデイスが、いかなるプロセスを経て歴史家になつたか、をめぐる最近に提示された見解など、とうてい支持できないだろう。そうした見解は、あまりにも自信満々にこう思い込んでいたからである。かれ自身も同時代の人びとも、現代の学者たちと同じく、歴史家の本性とその働きをめぐり、先入見に濃く染められていたのだ、と。トゥキユデイスは、ここかしこで主要テーマから脇道

にそれ、以前の歴史の——みずからに関心のある——個々の問題を論じているが、主たる関心はあくまでも、みずからの時代の歴史である。ペロポネソス戦争にあった。かれ自身は、その作品の冒頭で端的にこう口にしていて、わたしがこの作品に取り組んだのは戦争の勃発時で、それというのも、この主題の重要性をはつきりと確信していたからなのだ。とはいへ、次のような問いが、ただちに浮かび上がってくるのではないだろうか。当人はしかし、歴史的探求の技法をどこで学んだのか、さらには、そもそも何が、過去についてのかれの知識の源であるのか、と。現代の説明ではこうなる——かれは、ギリシアの歴史をすでに研究していたが、戦争の勃発によつて妨げられたので、こう納得した、この戦争こそ、みずからの技術を投入すべき偉大なテーマにほかならない、と。しかるに、これまでの探求でせつせと集められ、目下のところ打ち捨てられたままの資料をムダにしないためにも、かれは、これを盛り込むべく、作品のあちこちに、学者的な補注を挿入した……。このような説明はしかし、わたしの見たところ、政治史の生みの親+現実政治家+將軍といった人物（＝トゥキユデイス）によりは、現代の学者にこそ当てはまると思われてならない。前者なら、戦争そのものに個人的な役割を演じて、みずからの時代の政治問題にこそ最大の関心を抱いたであろうからである。トゥキユデイスを歴史家にしたのは、この戦争を措いてない。あまたの實際経験を積んでようやく学べる事柄を、単に書物に目を通しただけで学べる者などいないだろうが、それが、抜本的に異なっていると考えられる過去の時代——それをめぐる正確な真実などほとんど知られるはずもないと思われる——の事跡となると、しっかりした真実を学べる者などいようはずもあるまい。だからかれは、われわれが普通に抱く、歴史家のイメージと著しく異なっていた。かれは、本題を離れて初期の歴史の問題にくり返し脱線した——そこに顔を

視させる批判的コメントはまことに示唆に富んでいた——が、そのような脱線は、ほんのついでの場合もあれば、過去を用いて現在を説明する真剣な場合もあった。

この点を裏書きする主たる実例は、第一巻の冒頭に登場する『考古学的な補注』にちがいない。この補注があえて書かれたのは、もっぱら、トゥキュデデスの手で記述された『現在』に比べると『過去』などほとんど取るに足りない、という点を示すためであった。過去については実際のところ何も分からないのだから、ひたすら推論に訴えて復元する以外にまるで手はなかつたからである。それでもしかし、過去についてのかれの短い説明は、まことに要約的なだけにいつそう明らかに、歴史的事実を判断する際にかれが用いた基準のいかにあつたか、みずからの時代の出来事に当てはめて何が重要かを決定する尺度のいかにあつたか、を教えてくれるにちがいない。

トゥキュデデスは、あくまでもこう信じていた、ギリシアの人びとの過去の歴史など——わけても偉大で有名な事跡ですら——あえて語るには及ばない、というのも過去の生活には、大々的な政治組織の誕生や権力の発展などほとんど目にされないのだから……と。かれは、こうも口にしてゐる、そこには今日の意味での『商取引』もなかつたのだ、と。移住という、個々の種族がたえず追ひ払い合つて、ともに定住の望めない状況にあつては、安全など保証されようはずもなかつた。そして、ここにいう『安全』こそは——技術的知識に劣らず——しつかりした政治生活の第一条件なのである。トゥキュデデスに従うなら、国の中でもこの上なく肥沃な地域は、おのずと、奪い合いに晒される度合いも群を抜き、ゆえに、人口を激減させる度合いも群を抜いていた。だから、組織的な農業も資本の蓄積も顔を覗かせず、大規模な都市も、近代文明の他の要素もまるで目にされなかつた。トゥキュデデスは、

古えの歴史的伝統がいずれも、かれの抱懐する問にまるで答えてくれず、それゆえ、これをすべからく捨て去つて、替わりに、みずからの『仮説』をしっかりと据え付けた。すなわち、文化・政治・経済といった各分野での発展がいかに論理的に繋がりに合つてゐるか、へのみずからの明察に基づいた一連の大胆な『推論』がそれに当たるのだが、このような姿勢を目にすると、わけても教えられるところが少なくない。そうした推論にみられる知的性格は、拠つて立つところは異なるものの、原初の人間生活を仮説的に復元するソフィストの姿勢にも通じるところがあつた。トゥキュデデスは、前五世紀の歴史家の目で『過去』を眺めていて、その念頭に置かれていたのは『権力』を措いてない。技術的知識にせよ、経済的發展にせよ、知的文化にせよ、権力の展開に必要とみなされないなら、情け容赦もなく無視される傾向にあつた。強い海軍に支えられて、莫大な資産と広大な領土をわが手に収めること——何はともあれこれが、かれの意味する『権力』なのである。これは、明らかに、前五世紀のアテナイ人がその理想に掲げるところであつた。トゥキュデデスは、かつての世紀の文明を値踏みするにあたり、アテナイ帝国主義の基準を当てはめて、それを『不適合』と判定したのだつた。

かれ自身は、こうした基準を選び取つた点でも、さらには、それを初期の歴史に当てはめた点でも大いにユニークな存在であつた。かれは、ロマンと偏見を排した近代的な政治家の目でホメロスを眺めた。そのようなかれに、アガムノンノンの帝国は、歴史的証拠に基づいて構築された『ギリシア史』に登場した最初の偉大な権力であると映つた。かれは、容赦のない論理に訴えて、ホメロスの単一の詩文から——いささか強調しすぎる気もあるが——こう推論した、アガムノンノンの支配は、単に陸上だけでなく海上にも及んでいたはずで、それゆえ、大規模な海軍に支えられていたにちがいない、と。かれは、ホメロスにみられる艦船の目録

にわけても強い関心を示し——通常は詩的な伝統に疑いの目を向けていたのに——この目録にみられる、トロイ戦争に向けたギリシアの各派遣軍の力に触れた詳しい説明だけは、そのまま素直に受け入れて訝らなかつた。そのような説明は、初期のギリシアの資金力など取るに足りないものだ、という自身が固く信ずるところを裏書きしていたからである。かれはしかも、同じ証拠を用いて、当時の造船学が十分な発展を遂げていなかった点も実証した。トロイ戦争は、同盟を結んだ国々の企てた、ギリシア史上では最初の大規模な海外遠征であった。これ以前、ミノスの治めたクレタ島の海軍帝国——互いに争い合う初期ギリシアの半野蛮部族がくり広げた海賊行為に幕を下ろさせた——を除けば、そのような遠征もまるで目にされなかつた。ミノスの艦隊は、当今のアテナイ艦隊と同じく、手抜きなく海のパトロールにたえず従事していたはずだ・・・、とトゥキュデデスは思い描いた。このようにしてかれは、資本の蓄積、艦隊の建造、海軍力といった基準に照らしつつ、ギリシア史の全体をざっと走り抜け——それも、造船学の細かい技術的工夫に触れて本筋を逸れたり、過去のあまねく知的遺産・美的遺産をまるで顧みないで——ついにはペロポネソス戦争にいたつた。アテナイは、かれの信じるところでは、ペルシアに打ち勝つてのち、はじめて政治上の重要な位置を占めるようになった。島嶼部の国々や小アジアのギリシア都市がアテナイ同盟に加わるにつれ、アテナイは、これまでギリシアの支配勢力であったスパルタと肩を並べるライバルとなった。それ以後のギリシア史は、これら双方の権力組織による競い合い——時々の小事件や絶えざる不和に彩られた——の様相を呈し、とどのつまりは最終戦争を迎えたのだが、この戦争たるや、それ以前に目にされた権力闘争のすべてを「兎戯に等しい」と思わせるばかりに凄惨なものであつた。

トゥキュデデスは、初期のギリシア史をこのように描き出し、これ

自体は、大いに褒め称えられてもきたが、そこには、かれの歴史観が——余すところなく——とは言えないにしても——比べようもなくはつきりと表明されていたのではないだろうか。かれは、経済と政治の線に沿つて大胆に「過去」をスケッチしたが、ここには、当時の出来事に向けたかれの姿勢がはつきりと顔を覗かせていた。わたし自身は、ペロポネソス戦争の前史をめぐる当人の説明からここでの論をスタートさせたが、それは、あくまでも以上のような理由によるのであつて、そうした説明が、かれの作品の冒頭を飾っていたからではない。かれの手になる戦争記述には、同じ原理が、はるかに生々しい形で、しかも——はるかに大規模に当てはめられて——いつそうボヤけた形で目にされたが、ここではそれが、ほとんど純然たる抽象性をそのままに保っていた。前五世紀の現実主義型の政治のスローガンは、お定まりの文言通りにこの補注にもくり返され、読者の心に深い印象を刻んだので、読者は、トゥキュデデスの戦争自体の説明に触れるや、こう固く信じたのだつた、ここには、かつてギリシア史が味わつた最も大規模な権力の誇示と、最も由々しい政治的危機が赤裸々に記述されているな・・・、と。

掲げる主題がいつそう現実味を増し、この主題への関心がいつそう高まるにつれ、かれ自身も、この主題に客観的であるのがいつそう困難になつた。歴史家としてのトゥキュデデスが「何を目ざしたか」は、みずからの世界を敵対する陣営に両断した途方もない出来事（「ペロポネソス戦争」に向けて、かれが、できるだけ偏りのない公平な立場を確立しよう」と懸命に努めた点からも、はつきりと知られるにちがいない。かれがもし、こんなにも著名な政治家でなかつたら、客観的であろうとする当人の努力も、そう驚くには足らなかつたらうが、同時に、その偉大さも減少していたのではないだろうか。かれの念頭に置かれていたのは、詩人たちが口にする「絵のような英雄的過去」には背を向けて、ただひた

すら、飾りのない真実を、党派心に左右されずなるだけ正確に告げることであった。このような姿勢自体を励ましていたのは、いわゆる政治的態度でなく、イオニアの自然科学者たちとも共有された科学的態度であった。そうした科学的態度を、トゥキュデデスはしかし、時間の流れを超えた自然の世界から、さまざまな情念や党派の権益が混ざり合っ
て不透明に濁った、みずからの時代の政争の世界にすっかりと振り向けたから、大いなる知的勝利を博することもできた。かれと時代を同じくするエウリピデスは、自然の世界と人間のドラマの世界——今日なら「歴史」と呼ばれる——をめぐって、双方が厳しく分断され、この裂け目はどうして架橋できないと述べた。かれの言に従うなら、いうところの「ヒストリア」——「変わらざる」対象に向けた冷静な「省察」——が成り立つのは、自然の歴史を措いてなく、それゆえ、自然科学のみが真にヒストリアの名に値した。生々しい政治生活に足を踏み入れたなら、どうしても、憎しみや争いに纏いつかれないわけにはいかなかったが、それでもトゥキュデデスは、ここにいう「ヒストリア」をあえて政治の領域に移し換え、真理の探究というこの理想に、いつそう深い新たな意味を与えたのだった。かれの手でもたらされた、大いなる革新を理解したいなら、固有にギリシア的な「活動」の概念を思い出してみなくてはならない。ギリシア的な発想に従うなら、人びとを行為に駆り立てるのは「知識」を措いてほかになかった。だから、トゥキュデデスにおける真理の探究は、おのずと、実践的な目標を視野に収めていて、ゆえに、イオニアの自然科学者たちが取り組んだ没価値的なテオリア（観照）と大きく趣を異にしていた。アテナイ人であれば、正しい行為を導く以外の「知識」の役割など、およそ信じるだにできなかった。この点は、一方におけるイオニアの人びとと、他方におけるプラトンやトゥキュデデスの、埋めがたい差にちがいない。もつとも、これら二人のアテ

ナイ人は、まるきり異なった世界で活躍したのだけでも……。世の歴史家の多くは、「熱い心を欠いた目のみの存在」と皮肉られてきたが、このような言い回しは、ことトゥキュデデスには当てはまらない。かれには、事実を客観的に眺める姿勢が本来的に具わっていたが、それはしかし、生まれつき情熱に欠けていたからではなかったからである。ならばかれは、有り余る情熱を振り払うに足る強さを、どのようにして身に付けたのだろうか。そしてかれは、みずからの求める客観的知識の利点をどのようなものと捉えていたのだろうか。これらについて、かれ自身は、みずからの作品がそもそも何を意図していたか、を述べた箇所でも、もつとはつきりとこう口にしていった。「わたしの作品には神話の類いが欠けていて、これが、耳を傾ける魅力を半減させている、などと考える方々がおられるかもしれないが、わたしには、実際に生じた——しかも、人間の本性に従って何度でも同じ仕方でも繰り返すであろう——出来事の、飾りのない真実を研究したいと願う人びとのすべてが、わたしの作品を、為になる」と判定なさるなら、それで十分なのである。わたしが作品をまとめたのは、いつまでも称賛され続けるため、束の間の喝采を求めてのことではなかった」と。

個々人と国家の歴史は、人間の本性が変わらない以上、繰り返しされるいでは措かない——かれは、このような見解を再三にわたって表明していたが、ここにみる発想は、今日のわれわれが通常「歴史的態度」と呼んでいるものの、あくまでも対極に位置するのではないだろうか。真の歴史家なら、歴史は決して繰り返さない、と信じているはずだ——われわれは、こう考えて憚らないからである。歴史的出来事はすべからず、完全に、一回限りのものであって、一個人の生涯の出来事でさえ、繰り返しはありえない。しかるに人びとは経験を積み、苦しい経験は——ヘシオドスにも引用された古い格言も告げるように——当人を利口に

する。ギリシアの思考が常に目ざすのは、一般的な結論にいたり着いて、このような知識を手にする事なのである。それゆえ、個々人と国家の歴史は繰り返す、というトゥキュデデスの公理は、今日的な片寄った意味での「歴史意識」の誕生を告げているのではない。かれの作品には、なるほど、個々の出来事への歴史的関心は、ひたすら個々の出来事のみ焦点づけられている、といった今日的姿勢が目に見えるかもしれないが、作品自体はしかし、これらの出来事を通り抜けて——すなわち、異なり合った奇妙なもの一般を超えて——さらに、これらの出来事に体現された普遍的・永遠的な法則にまでたどり着こうと努めていた。かれの歴史に、色褪せることのない「活きた現実」の魅力を付与しているのは、このような知的姿勢にほかならない。この姿勢は、かれの政治的見解の本質部分を占めてもいた。似通った状況下では、似通った原因から常に似通った結果が生じてこそ、はじめて政治家は、先を見越して、計画通りに事を進められたからである。この種の因果連関によって経験も可能となり、それゆえ、たとえ限られた範囲にせよ、来るべき事柄について何らかの見通しも立ったからである。

ソロンの口からこのような事実が述べられたとき、ギリシアの政治思想はスタートした。かれ自身が深い関心を寄せていたのは、いうまでもなく「社会有機体の病理学」であって、この有機体は、反社会的要素が過剰になると深刻な病的墮落に陥った。社会は一個の有機体である、というかれの観念に従うなら、反社会的行為がもたらす有害な結果は、まさしく自然の反作用でしかないのだが、かれはしかし、みずからの宗教的見解に照らして、そのような事態の中に、神的な正義が下す「罰」をしつかりと見た。かれの時代以後、アテナイは「大いなる権力」と化し、さまざまな独立国同士の相互関係や、われわれが「外交」と称する事柄など、まさしく巨大で新しい政治的経験の世界が登場した。ここにいう

外交に長じたアテナイの第一人者がテミストクレスにほかならず、トゥキュデデスは、記憶に残る二、三の箇所、この人物を評して「ほとんど新しいタイプの人間といってよい」と述べていた。この人物の性格を形造っている本質要素として述べられているのは、先見の明と迷いのない判断であって、トゥキュデデスの作品が意図していたのは、これらの能力をしつかりと後代に吹き込むことであつた。かれは、作品のいずこでも同じ能力をくり返し強調しているが、これによつても、このような狙いがいかに大真面目であつたかは、容易に伺えるにちがいない。かれは、実地の経験を介して政治的知識に至ろうとひたすら努力した。この点は、この歴史家の「本当の自己」を再生するにあつて、われわれが是非とも剥ぎ取らなくてはならない表面上の単なる塗装——ソフィストにみる知性主義——などでなく、かれの本物の偉大さをしつかりと証していた。歴史は、その一方においてあまたの政治的経験を供給し、他方において、何らかの宗教的、倫理的、哲学的な観念を体現していたが、かれの信じるところを述べるなら、歴史のそもその本性は、あくまでも前者に求められた。かれにとつて、政治とは、みずからの「内在の法」に支配された世界にほかならず、この法を捉えようとすれば、歴史的事実を、個々別々にでなく、むしろ連続したプロセスの諸部分とみなして吟味しなくてはならない。トゥキュデデスは、政治的出来事の本性とその法則に向けた透徹した洞察のゆえに、あまねく古代の他の歴史家たちに大きく立ち勝つていた。このような洞察もしかし、かれが、アテナイの「黄金時代」を生きた人物であつたればこそ可能だったのではなかつたか。この時代がいかに輝いていたかは、たとえば、フィデアスの芸術とプラトンのイデア論——同じ知的タイプに属しながらも本質的に異なつた二つの作品——を生み出した点からもしつかりと例証されるにちがいない。政治的出来事を理解する知といったかれの知識

論は、『新オルガノン』の「周知の言葉」を借りてこそ、もつとも的確に描き出されるのではないだろうか。ペーコンは、みずからの新しい科学的理想をスコラ哲学に対比させながら、こう語っていたからである。「人間における知と力は一つに合わさるといつてよい。結果を生じるには原因が知られなくてはならないからである。すなわち、自然を征服するには、まずもつて自然に服従しなくてはならない。ここにいう考察レベルでの原因に当たるのが、制作レベルでの規則なのである」と。

トゥキユデイスの政治哲学の独自性は、一方に、ソフィストやプラトンの政治哲学を、他方に、ソロンの宗教的な国家観念を対置させたなら、どうした点に求められるだろうか。かれは、いかなる一般的教義も唱道しなかった——これが、その独自性にほかならない。かれの作品には「ファビュラ・ドークェット（この話の教訓はくである）」がまるで登場しないのである。かれは、出来事を直接に物語る中で、政治の論理を積みと訴えかけた。このように出来たのは、かれの扱った主題が、きわめて特別なもの（ペロポネソス戦争）だったからと言うほかはない。この戦争は、政治における生々しい因果連関をわけても鮮明かつ要約的に提示したからである。かれの歴史観を、ペロポネソス戦争とは別に、ラシダムに選ばれた一連の出来事にいくらか当てはめようとしても、おそらくは徒勞に終わるほかはないだろう。たとえばそれは、どのような時代でも、アッティカ悲劇やプラトン哲学のような大傑作を生み出せるはずだ、などと期待するのと事情はまるで異なる。偉大な出来事がどれほど重要であろうと、これの事実面のみを単に記述するだけなら、とうてい、政治哲学者としての当人の目ざすところを満足させないだろう。かれが必要としたのは、出来事の知的な——つまりは普遍的な——局面を顕わにする「特定の好機」であった。作品の流れを中斷するあまたの演説は、当人の語り口をわけても浮かび上がらせるのではないだろう

か。これらは、かれ自身が、みずからの政治思想を表明する格好の媒体だったからである。かれは、歴史をまとめるにあたっていかなる原則に依拠していたか、をみずからの口から説明しているが、これを耳にする時、重要人物のあまたの演説も、外的な事実を記録するのと同じ正確さで忠実に再現されている、と当の本人は口にしてはいるのだ、などとおのずと予想してしまうかもしれないが、さにあらず、かれ自身は、きつぱりとこう口にしてはいた。わたしは、かれらの言葉を逐語的に写していたわけではない、と。だから読者は、実際の出来事の説明に用いられた「正確さ」を、そのまま演説にも当てはめてはならない。わたしが再現するのは、これらの演説の「意味の総体（シユンパーサ・グノーマー）」にほかならない——これが、かれの言わんとするところであった。もつとも、個々の人物が口にする詳細は、具体的状況が要請する——と、トゥキユデイス本人の信じた——事柄ではあつたけれども……。これなど、まことに貴重な工夫と評されるべきで、とうてい、なるだけ正確を期す」といった歴史家の情熱から説明されるものではない。これを説明できるのは、あまねく出来事の究極の政治的基盤をしっかりと洞察しようと願う政治家の切なる思いを措いてないだろう。

ここにいう「切なる思い」は、文字通りの意味では「成就」しがたいにちがいない。何らかの状況をどれほど分析しても、当の状況をめぐって人びとが実際に口にした事柄など導き出せようはずもなかった。たとえ導き出せたとしても、それはしばしば、真実めいた「嘘」でしかなかったからである。われわれは常に、人びとの考えたところを顕わにせよと強いられるのだが、これ自体は「不可能」というほかはない。トゥキユデイスはしかし、こう信じて疑わなかった、われわれは、個々の党派が突き動かされた「動機」なら認知もできるし、それゆえ記録もできないわけではない、と。だからかれはこう決心した、それならば、集會に

向けた公的な演説の中で、あるいは、メロス島談義にみられる閉じられた空間内で、人びとに、みずからの最も奥深い動機や信念の類いを説明させてやろう、それも、個々の党派が、みずからの政治的姿勢に合致する形で口にせざるを得ないはずだ、とわたし自身が判断した通りに……と。こうしてかれは、あるいはスパルタ人、コリントス人、アテナイ人、さらにはシュラクサ人、時にはペリクレスないしアルキビアデスの姿をまとつて、せつせと読者に語り掛けた。これらの人物にふさわしい演説を創り上げる技法そのものは、形式の上で、ホメロスの叙事詩に大きく手本を仰いでいたが、わずかには、ヘロドトスにも範が求められた。トゥキュディデスはしかし、そのような技法を大々的に用い、これのお蔭で、ついにはこうも評されるようになった、ペロポネソス戦争は、ギリシアがみずからの知的生活を謳歌した全盛時に、人間生活のわけでも奥深い問題に及んだ一連の討論を激しく喚起した点で、何はともあれ、思想の戦いであつて、次いで、軍事力の戦いであつたにすぎない、と。これらの演説に——かつて試みられたように——何らかの状況下で実際に語られた事柄の名残をせつせと求めても、つまるところ、フィディアスの刻んだ神像の中に具体的なモデルの面影を何とか読み取ろうとするに等しく、まるで望みのない徒勞というほかはない。たとえトゥキュディデスが、みずからの描く個々の論争の推移をめぐつて間違いのない情報をどれだけ得たにしても、明らかに、かれの作品に登場する演説の多くは生まれなかつたろうし、それらの大部分は、言うまでもなく、情報に基づく「改訂版」と実質的に異なつていたはずである。かれは、個々の事例の特定状況を考慮したなら、その状況が何を要求していたか（タ・デオント）もおのずと決まつてくるはずだ、と信じて疑わなかつたが、そのような信念の底には、こうした争いを展開するそれぞれの立場は、動かしがたい論理を具えていて、当の争いを俯瞰する人間は、そうした論

理をしかるべく展開できる、というかれの確信が目にはされた。これ自体は、まことに主観的と思われるかもしれないが、トゥキュディデスは、これに基づいて、みずからの紹介する演説を「客観的な真実」と評して憚らなかつた。これの素晴らしさを十分に理解したいなら、この歴史家の内部には政治思想家が潜んでいる、という点を正しく捉えなくてはならない。これらの想像上の演説では、すべてに同一の様式が用いられ、それらは、当時の話し言葉より常にはるかに壮大で、今日の感覚からすると技巧的とも映る「対照法」を随所に散りばめていた。これらの演説は、極端に難解な言葉を用いて極端に難解な思想を表明しようと努め、ソフィスト的な雄弁家から借り受けられた比喩的文体とは驚くほど異なつた文体を用いながら、この上なく直接に、トゥキュディデスの思想——難解さの点でも深遠さの点でも、わけても偉大なギリシアの哲学者たちの仕事に比肩されてよい——を表明していた。

トゥキュディデスは、みずからの原理を口にする中で「政治的思考」の何であるかをそつと仄めかしているが、そのような思考の最適の具体例の一つは、戦争の原因を解き明かした『戦史』の冒頭で目にされるのではないだろうか。そういえばヘロドトスも、ヨーロッパ（西方）とアジア（東方）の争いの原因はどこにあつたか、から作品を始めていて、かれに従うなら、それは要するに「戦争という罪」の問題に帰着した。ペロポネソス戦争の両陣営も、やはり同じく、この問題に深く苛立つていたが、戦争の勃発をめぐつて、あまねく細目に互つて何百回も論じ合われたのち、それでも争いの責任を特定できず、両陣営は、空しく相互の告発をくり返すはなかつた。そうした中でトゥキュディデスは、これまでにない仕方の問題を提起した。すなわち、戦争の「真因」とその誘因である具体的論争点をしっかり区分して、あくまでも真因は、絶え間なく強化するアテナイの力が、スパルタに脅威の念を掻き立てた点に

あった、と結論したのである。ここに登場する「原因」という観念は、トゥキユディデスが用いる「プロパシス」というギリシア語からも明らかのように、もともとは医学用語からの「借り受け」であった。病気の本当の原因とその兆候にすぎないものを最初に学問的に区分したのは、医学だったからである。トゥキユディデスは、生命体科学（＝医学）で用いられた「区分」を、ペロポネソス戦争の原因という問題に移し替えたが、これは、単なる形式上の行為に終わらなかった。その含意するところは、問題そのものが、道徳法の主観的領域から持ち出されて十二分に客観化された、だったからである。これによって政治は、自然の因果律に支配された「独立分野」としての市民権をしっかりと手に入れた。ギリシア政治の公然たる危機を導いたのは、かれの記述に従うなら、敵対する勢力の隠然たる争いにほかならない。トゥキユディデスがそうしたように、客観的な因果関係が認識できたなら、いくらかは安心も得られるだろうか。このような認識は、おのずと観察者を高めて、陣営間の憎しみに満ちた争いや、いづれが有罪でいづれが無罪かをめぐる醜い論争等々を超えた地点にまで導き上げてくれたからである。それにはしかし、他方で、いささか気分を塞ぎ込ませる点がなかったわけでもない。かつては、道徳的判断に従った「自発行為」と思われていた事柄が、その実、いつそう高次の必然に条件づけられた、長くて継続した不可避のプロセスの単なる結果でしかない点をあからさまに明かしたからである。

戦争の勃発に先立ったプロセスのこうした局面——ペルシアが敗北してのち五十年に及ぶアテナイ勢力の強大化——を、トゥキユディデスがありありと描き出しているのは、戦争への直接の前哨に触れた箇所盛り返された有名な「付説」においてであった。ならば当人は、なぜあえて「付説」という特有の構造的工夫を用いたのか。この点について、かれ自身はこう口にしていて、この箇所であつたしは、作品が準拠して

バイデリア（その五）

る年代枠をどうしても超えないわけにはいかなかったのだ、と。しかも、そこに描かれたアテナイ帝国の興隆をめぐる簡単なスケッチは、かれ自身も告げるように、それ自体としての価値をしっかりと具えていた。重要きわまるこの時期を適切に記述したものは、かれの時代まで何一つ目にされなかったからである。単にそればかりではない。いわゆる「五十年史」を綴ったこの付説、さらには、戦争の真因についてトゥキユディデスが口にする事柄はすべて、前もって先にまとめられ、しかるのち戦争の前哨の箇所挿入されたのであつて、かれが元々に心掛けていたのは、戦争の勃発に直接に先立った外交的・軍事的な出来事のスケッチにほかならない——このような印象が強いのである。そうした印象が生まれたのは、単に、この箇所の注目すべき構造によるばかりでなく、次のような事実も大きく与かっていた。なるほどトゥキユディデスは、最初の草稿では戦争の始まりを描いたにちがいないにしても、アテナイ帝国の強大化をめぐる付説は、城壁の取り壊し（前四〇四年）にもコメントしているので、草稿そのものは、戦争の終了時まで目下の形を整えることは叶わなかったはずだ、という……。しかも、戦争の真因をめぐるかれの叙述——付説によつて「裏書き」された——は、明らかに、この問題に向けた生涯に及ぶ深い省察の結果にほかならない。これは、トゥキユディデス当人の「円熟」の所産なのである。かれは、初期の人生では「単純な事実」をはるかに多く扱ったが、のちには、いつそう政治哲学者の道を進んで、ますます大胆に問題自体を「全体として」捉えるようになった。すなわち、問題の把握にあたって問題相互の内的連関とそれ自らの論理的必然をすべからず盛り込んだのであつた。われわれの手にある作品が大きな魅力に溢れているのは、これが基本的に、きわめて長い眺望を具えた単一の政治的命題を提示していたからにほかならない。この命題はそして、トゥキユディデスが、戦争の真因を語った箇所の冒頭に

はつきりと表明されていた。

いやしくも「本当の歴史家」なら、戦争の真因を、トゥキュディデスのいわゆる「長い時間をかけて進展する高次の必然」といった意味に解しながら、そもその最初から、当の真因をはつきり捉えていたにちがいない——こう決めてかかるのは、反歴史的な「ペティティオ・プリンピキイ（不当前提）」というほかはない。これを彷彿させるわけでも注目すべき類例は、レオポルド・フォン・ランケの『プロシア史』ではないだろうか。一八七〇年の普仏戦争後に出版された第二版で、かれは、プロシア発展の歴史的意義を、まったく新しい観点から眺めてこう述べたからである。わたしは、この時点ではじめて、途方もない「大発想」に行き当たったのだ、と。そしてかれは、第二版の序文で、仲間の学者たちに謝りつつも当の発想をつぶさに解説した。それは、いうところの「事実」ではなく、「政治的な歴史解釈」を扱うものだったからである。新しいタイプのそうした一般化は、プロシア国家の成立をめぐる当人の説明にわけても深い影響を及ぼし、ためにかれは、これを全面的に書き直して、基本的にいつそう幅広くいつそう深いものにした。トゥキュディデスも、戦争の起源を叙述した作品の冒頭を、戦争が終わってから改めて論じ直したが、これも、右の場合とその軌を一にしていたといつてよい。

アテナイの力の増大こそ「戦争の真因」にほかならない、と了解したのち、かれは、それが内的に何を含んでいるか、を論じようと努めた。戦争の前哨を説明した箇所には、かれは、アテナイの外的発展をめぐる「付説」を加え入れているが、これは実に、スパルタでの会議——この席でスパルタ人は、同盟国の人びとから猛烈に突き上げられ、ついに開戦を決議した——を活写した驚くべき記述への単なる「補足」にすぎなかった。この点は注目されてよいだろう。なるほど開戦の宣告は、実際には、よりのちのペロポネソス同盟の定例集会を待たなくてはならなかった

が、トゥキュディデスはしかし、誤りのない洞察に訴えてこう認識した。アテナイに不満を抱くごく少数のラケダイモンの盟邦のみが参列した最初の非公式の会合こそ、わけても重要であったのだ、と。かれはだから、この会合を「決定的瞬間」として特徴づけ、これを際立たせるべく、参列者による四つもの演説を報告している。ちなみに「四つもの演説」という多さは、ここ以外のどこにも目にされない。この会合はもっぱら、ラケダイモンの盟邦が抱くアテナイへの不満と直接に結びついていて、トゥキュディデスに従うなら、スパルタ人が開戦を宣しないわけにはいかなかったのは、あくまでも、かれらの盟邦の議論に促されたからでなく、アテナイの力がギリシア一円にいつそう拡張していく状況に自身でも脅威を覚えたからにほかならない。現実の論争では、こうした点はそうあからさまに述べられなかったが、トゥキュディデスはしかし、おのずと論議の主題であったはずの「国際法」の問題は大胆に黙殺して、盟邦によつて為されたすべての演説から、コリントスの代表団による最終演説のみを記録した。この代表団こそ、アテナイ人を「不倶戴天の敵」に仰いでいたからである。それというのもかれらは、アテナイに次ぐ第二の通商力をギリシアに誇つていて、アテナイ人はおのずと「生来のライバル」であり続けたからにほかならない。かれらは、明らかにアテナイを「憎悪の眼差し」で眺めていたから、トゥキュディデスもかれらを促して、活力に溢れて冒険を好むアテナイとその逆のスパルタをあえて対比させながら、いまだ躊躇を捨て切れないスパルタ人を最終決定へと導かせたのだった。かれらの描き出すアテナイの国民性は、公的な祝祭でアテナイの雄弁家が口にするそれよりも印象的で、その程度たるや、ペリクレスの追悼演説——トゥキュディデスが自由に創作したもので、コリントスの代表団の演説も、いくばくかはここから借用されていた——に語られたそれをすら凌駕していた。コリントスの演説は、この国

の大使がスパルタで実際に口にしたものでなく、基本的に、トゥキュデデス自身の創作にほかならない、という点を真顔で疑う人間はいないだろう。アテナイが、一方の敵（＝スパルタ）の面前で他方の敵（＝コリントス）から称賛される、といった形の演説をまとめたのは、最高度のレトリックを駆使した「至芸」と褒めるほかにないが、そこには、二重の歴史的意図もすっかりと込められていた。というのも、これが直接に狙ったのは、戦争へと導く「扇動」を具体的に記述することであったが、究極に狙ったのは、アテナイの勃興を支えた「心理学的基盤」をつぶさに分析することを措いてなかったからである。スパルタにみる鈍感さと怠惰、旧態依然とした世間体と偏狭な保守性等々を背景に置きながら、コリントス人たちは、羨みと憎しみと称賛を混ぜ合わせて、アテナイ人の氣質を次のように記述した。休息を知らない活力、計画し活動して止まない驚異的な躍動（エラン）、いかなる状況にも対処でき、いささかも折れることなく失敗を乗り越え新たな活動に向かう融通性に富んだ多才……——ざっとこのような能力を駆使して、アテナイの国民は、その射程に入ったすべてを接収して見事に変形したのだった、と。これはむしろ、アテナイの「徳性」を道徳的に褒め称えたものでなく、過ぐる半世紀における——あるいは戦争以前にすらそうであった——アテナイの驚異的發展を説明づける「精神的活力」を述べ上げたものにほかならない。

トゥキュデデスは今や、大胆にも同種の別の演説によって、こうした記述の効果を相殺しようと腐心する。ここにいう演説は、スパルタ人たちが、戦争を宣するか否かを審議していた席でアテナイの大使が口にしたもので、舞台はおのずと、外交会議の場から特別な公的集会——アテナイ人の耳に達するように召集された——へと移し替えられていた。この演説がなぜあえて試みられたか、をめぐってトゥキュデデスの指

摘した外的動機は——おそらくは意図的であろうが——どちらかといえば曖昧に近い。そもその演説とその反対演説が相手取っているのは、スパルタの政府でなく一般聴衆であり、双方の演説はしかも、一体となつて強力な効果上のまとまりを成していた。そもその始めから今日にいたるアテナイの興隆をめぐる、すでに心理的な分析がコリントス人の手で加えられていたが、今やさらに、アテナイ人の手で「歴史的分析」も加えられた。かれらが記述するのは、しかしながら、アテナイの勝ち誇った發展がたどる外的段階——これなら、少しのちに「付説」でなされた——ではない。かれらが分析するのは、アテナイを促して自己の力をこなにも十全かつ論理的に展開させた「動機」が、どのような内的發展を遂げてきたかにほかならない。

かくしてトゥキュデデスは、同一の問題をめぐる三つの異なった観点——すべてが同一の帰結に導いていく——を紹介する。アテナイに力の増大を強いたそもその「歴史的必然」に触れたアテナイ大使の演説は、ここにいう「力」のいかに真つ当であるかを、トゥキュデデスならではの壮大なスケールでひたすらに訴えていた。三つの観点そのものは、あくまでもトゥキュデデスの発想であったが、これらが実際に手にされたのはアテナイの崩壊以後のことであった。この時かれは、政治的体験の頂点で辛酸を嘗めないわけにはいかなかったからである。この箇所ではしかし、これらの観点はすべからず、無名のアテナイ大使の口から戦争の開始に先立って「一種の予言的知識」として語られていた。アテナイの力はだから、トゥキュデデスの見解では、マラトン（の陸戦）とサラミス（の海戦）に勝利した輝く武勇によって、ギリシア人たちの政治生活と自由の維持に果たした「忘れがたい役割」に根差していたことになる。アテナイは、盟邦の意思によって、こうした優位差を実質的な覇権に置き替えてのち、スパルタの妬みを怖れるあまり、今や、伝

統的な卓越性からさらに歩を進めて、みずから勝ち取った強さをいっそう強固かつ永続的に確立しようと、同盟の統制をますます中央集権化して盟邦の脱会を防ぎ、かくして徐々に、元々は独立した盟邦に無理やり「従属」を強いたのだった。アテナイは、恐怖という動機に加えて、野心と私欲にも強く絡め取られていたといつてよい。

およそ以上が、人間の本性という不変の法則によつて、アテナイの力が強大化しないわけにはいかなかった道筋にほかならない。スパルタ人たちは今や、こう信じて疑わなかった、われわれは、利己的な自己増大（「アテナイ」）に対抗する「正義」の立場を代表しているが、もしも、しかるべくアテナイを滅ぼしてその力を引き継いだなら、ギリシアの共感、われわれの元からまもなく移り去つて、およそ力たるもの、その持ち主を替えることはあつても、みずからの政治的性格や、その方法や、その効果の程をならん替へはしない、のを証明するにちがいない、と。戦争の第一日目から、早くも世論にみられたのは「アテナイ」専制の導き手、スパルタ「自由の守り手」の等式であつた。トゥキュディデスは、目下の状況ではこの等式も完全に「正鵠を射ている」と考えたが、他方、こう見ることも忘れなかつた。ここにいう「暴君」と「解放者」という役割は、アテナイとスパルタに不変の道徳的特性と直接に対応しているわけではなく、もしも力の優劣が入れ替わつたなら、目にした人を仰天させることにも、わずか一日で交代するような仮面的代物にすぎないのだ、と。これ自体は、間違いなく「経験の声」にちがいない。すなわち、アテナイの崩壊ののち、「解放者」を任じたスパルタの敷いた極端な専制支配を介して、泣く泣くギリシアが手に入れることになつた苦い経験の・・・

トゥキュディデスの仕事の継承者であつたクセノポンは、しかしながら、あの時代の人びとの大半が、あまねく政治権力に内在する「法則」

の掴み取りからいかに遠く掛け離れていたか、を切々と紹介している。かれは、道徳的正義を率直に信じていたので、スパルタの覇権の崩壊とアテナイの崩壊がともに、人間の傲り（ヒュブリス）に対する「神の罰」にほかならない、と考えた。これを今、トゥキュディデスにおける「事実の分析」に対比させるなら、かれ自身の途方もない知的卓越がよく理解できるのではないだろうか。かれは、手に入れようと努めていた十分に客観的な観点をきつちり手に入れたが、それは、戦争の勃発へと導いた個々の出来事の内的必然性をしつかり洞察できたからにほかならない。これ自体は、アテナイを判定する際にも、さらにはスパルタをそうする際にも適用された。というのしかれば、アテナイの権力への歩みは、それ自体として必然的で避けがたい、と考えていたのと同じく、スパルタが、アテナイを怖れるあまり開戦に踏み切らざるを得なかつた点も、やはりしつかりと見逃さず、双方をあくまでも同じ重みで訴えていたからである。この点は、断じて過小評価されてはなるまい。この箇所でも、さらにはトゥキュディデスの他の箇所でも、当人の語法は「曖昧でありがちだ」などと語るのとは、とうてい許されぬ。わたしの信じるところ、二、三年に及んだ「不安定な平和」という中断をへて新たに勃発した第二の戦争にも、かれが、やはり同じ言葉を用いている点など目撃されてもいなのである。隠れた敵意の時期をへて、双方の陣営は、ふたたび争いを始めないわけにはいかなかつた——これが、かれの口にしたところであつた。このような言葉が登場するのは「第二の序文」と呼ばれる部分であり、ここでも、アルキダモス戦争を叙述したのち、双方の戦争は、あくまでも「一つの大戦争」とみなされてしかるべきである、という革命的発想を提示していた。この発想は、戦争の原因を論じた箇所に表示された「戦争自体の避けがたい必然」といった観念と大いなる一体を成しているのではないだろうか。双方はともに、かれの政治的洞

察が、最終にして最高の発展段階を迎えた時点での「所産」だったからである。

これらの戦争はまさしく一体を成している、といった議論とともに、われわれも、戦争の原因論から「戦争そのもの」に移っていくとしよう。かれの戦争記述には、やはり同じく、政治思想による事実への意図的浸透がはっきりと目にされた。前五世紀のギリシア悲劇がのちのドラマと区分されるのは、前者には「コロス」が具わっていて、コロスの思想や情念が、たえず筋の展開を映し出し、筋の重要箇所を強調していたからにはかならない。これと同じく、トゥキュデデスの歴史の語り口も、次の点で後継者たちのそれから明瞭に区分された。かれの事実はすべからく、絶えざる知的活動に伴われて存分に明瞭化されていた、からである。ここにいう知的活動はしかし、長つたらしい解説の連続として登場せず、普通には、演説を介して知的な出来事に移し替えられ、かくして、思慮深い読者の前に生き活きと直接に提示されたのだった。それらの演説は、さまざまな教訓を蔵した無尽の宝庫であったが、ここでは、そうした演説の政治的発想がいかに豊かであったか、など記述している暇はとっていない。トゥキュデデスは、これらの発想を提示するにあたり、いくぶんは警句を、いくぶんは精緻な特徴を具えた論理的推論をもつてし、しかも、同一のトピックを扱った二つ——ないしはそれ以上——の対抗演説を、まことに好んで一緒に並置した。後者は、ソフィストの常用した「アンティロギア（対論）」という技法にはかならない。こうしてかれは、アルキダモス王とステネレイダス執政官の両演説を介して、戦争勃発の直前にスパルタの政策を牛耳っていた二つの主勢力、すなわち、平和を切望する保守的な和平派と、その対極に位置する徹底した主戦派を見事に浮かび上がらせた。それと同じく、かれは、シケリア遠征という冒険的企てに対するアテナイ民衆の二つの姿勢を、ニキアスとア

ルキビアデスの両演説に具体化した。これらの人物は、遠征の指揮官に連携して当たるべきなのに、遠征策をめぐって、拠って立つ姿勢をまるで異にしていたからである。トゥキュデデスは、ミテュレネの反乱を記述する際に、この機会を活かして、アテナイの穏健派と急進派がそれぞれに主張する同盟政策を、集会でのクレオンとディオドトスの対抗演説を報告しながら説明し、慌ただしい戦時に盟邦をしかるべく処遇するのがいかに困難か、をありありと浮かび上がらせた。かれはそして、プラタイアが陥落してのち、プラタイア人とテバイ人が、スパルタの執行委員会を前にくり広げた演説において、戦争と正義がいかに共存しづらいか、をはっきりと論証した。この委員会は、裁き手がすべからく告発側の盟邦であったのに、プラタイア人は「公正な裁判」を受けたのだ、と世間に印象づけるべく、あえてそう装ったからである。

トゥキュデデスの作品は、党派のスローガンが物語る問題——政治におけるイデオロギーと事実の関係性等々——の具体例をたつぷりと与えてくれるのではないだろうか。スパルタ人は、自由と正義の旗手としての役割を宣伝するべく、殊勝ぶつた道徳心をどつきりと口にしないうけにはいかなかったが、その道徳心は通常、みずからの利益とあまりにも一致したので、かれらは、どこで一方（＝道徳心）が終わり、どこから他方（＝利益）が始まるのか、をあえて自問する必要も覚えなかった。アテナイ人の置かれた立場は、スパルタ人よりさらに難しく、ゆえにかれらは「国家の名譽」に訴えないわけにはいかなかった。このような訴えは「まことにシニカル」と映るかもしれないが、時として、「解放の面々」——ブラシダスは、かれらの中でもわけても好感度が高く、わけでも偽善度が薄かった——の口にしたお座なりのスローガンよりはるかに強い共感を掻き立てた。

大勢力に挟まれた弱小ポリスが戦争のさ中にいかに中立を保つかとい

う問題は、メロスとカマリナでの演説において、二つの異なった観点——正義のそれと政治的リアリズムのそれ——から論じられている。異国の敵たちへの恐怖と、最大のシケリア国家（シラクサ）の覇権への憎しみに引き裂かれて、実のところ、双方の家系への「天罰」を祈るほかになかったシケリア人たちは、利害の対立からバラバラになった国家群を「共通の危険」によって一つにまとめ上げる、という問題を体現していた。戦いに勝利しての和平か、それとも、相互の同意による和平か、いずれを選択すべきかの問題が、ピュロスの地でスパルタが不運にも敗北してのち持ち上がった。この敗北でスパルタは直ちに和平を切望したが、アテナイ人はしかし、長引く戦争に辟易しながらも、いかなる調停の申し出にも直ちに「否」と応答した。戦略そのものに影響を及ぼす戦争の物理的問題は、さまざまの將軍がみずからの軍団に語り掛ける演説中で論じられ、政治生活に影響を及ぼす——たとえばペリクレスの論じた、アテナイ人に色濃く漂う戦争忌避感や悲観主義のような——それは、指導的な政治家のさまざまな大演説で取り上げられた。トゥキュディデスも、疫病の生々しい体験がもつ途方もない政治効果をしつかり記述している。この疫病は、あまねく士気を挫いて、アテナイに計り知れない損失をもたらしたからである。そしてかれは、コルキュラでの革命の恐怖を描いたのち、長引く戦争と荒れ狂う階級闘争が社会のモラルをいかに壊し去り、あまねく社会基準にどのような価値転倒が生じたか、も赤裸々に説明している。このような記述の目ざすところは、明らかに、疫病の記述との対比であって、そうした対比は、双方の現象を冷静に分析することでいっそう強化された。かれは、戦争の起源を論じた際には違つて、ここでは、あくまでも「道德家の立場」で説教せず、むしろ冷静に吟味し調べ上げて、まさしく「医者立場」で診断を下している。かれは、公衆道徳の崩壊をめぐるこうした説明が「戦争の病理学」を記

述する際にしっかりと役立ってくれるだろう、と信じて疑わない。

トゥキュディデスは、戦争中に生じた由々しい政治問題をすべからく網羅して扱ったが、この点は、これまでの簡単な要約からも十分に納得されるにちがいない。そうした問題を論じるべくあえて選び出された「誘因」は、最大級の注意を払って選別され、確かに、ごく普通の一連の出来事を介してなら、これは、必ずしも常に仄めかされるとは限らないだろう。かれは、ある場合には、戦争の残忍さと苦悩を注意深く前面に押し出し、ある場合には——二、三の実例に訴えるのみで戦争のそうした側面は十分に例示できたから——むしろ冷静な言及に徹してもっと大きな恐怖すら無視するといったように、よく似た出来事を異なった仕方で取り扱って憚らない。

戦争の実際場面を語る際にも、戦争の起源を説明した際と同じく、政治権力の勃興とその維持をめぐる問題がきつちりと中心を占めていた。実のところ、これまでに述べた個々の問題の大半は、この問題と深く結びついていたのだが、トゥキュディデスはしかし、たとえこの問題を扱うにしても、普通の権力に狂う政治家の見地からそうしたのでなく、おのずとそれは、みずからの政治的洞察に照らしてなされた。かれの目には、この問題はあくまでも、全体としての人間生活——必ずしも全部が権勢欲に支配されているわけではない——の「一部」として映った。アテナイ人みずからが、わけても露骨で情け容赦のない「権力の愛好家」でありながら、正義こそ、みずからの帝国内の最高規範にはかならないと認識し、祖国のアテナイが、オリエントの専制国家と違つて、あくまでも正義に根差した近代的な「法治国家」であるのを大きな誇りとしていたのは、まことに意義深いとみなくてはならないが、こうした中身は、アテナイの使節が、スパルタの集会を前にしてアテナイ帝国の外交政策を擁護した演説中で口にされていた。トゥキュディデスは、国内での階

級闘争が、まことに一般的な「万人に対する万人の闘い」へと転落していく事態こそ、国家を蝕む「深刻な病」にほかならないと考えた。けれども、それが国家对国家の国際関係になると、事態もそれなりに異なつてこざるを得ない。そこでもやはり、正義に支えられた盟約の類いはあるだろうが、最終の決定権をもつのは、つまるところ「力」であつて「正義」ではないからである。もしも対立する双方が、強さの点でざつと同等なら、双方の関係は「戦争」と呼ばれるかもしれないが、どちらか一方が格段に勝っているなら、それは「制圧」と呼ばれるにちがいない。ここでの後者を例示するべくトゥキュデデスが紹介したのは、中立を保つていたメロスという小さな島の実例であつた。この島は、制海権にまさるアテナイに打ち負かされたからである。ここにいう事件は、それ自体としてさほど重要でもなかつたが、一世紀のちまでギリシア人の心から消え去らず、アテナイへの憎しみを掻き立てて止まなかつた。当然ながら、戦争中はおのこと、アテナイの主張が呼び覚ましたほんの僅かな「共感」でさえ、徹底して打ち砕いて憚らなかつたのである。

以上は、トゥキュデデスが振るつた見事な手腕の古典的実例にほかならない。かれは、出来事をもつ「事実としての重要性」を完全に切り離し、その出来事を用いて一般問題を象徴させつつ、みずからの語りを発展させて政治的思考の傑作たらしめたからである。二人の論者が、議論によつて議論を、はたまた応答によつて問い掛けを巧みに受け流す様を紹介して、あまねく避けがたい必然の出来事における権力と正義の痛ましい葛藤を永遠化するべく、ここで具体的に用いられているのは「対話様式」という、かれの作品のいづこにも顔を覗かせないソフィスト的な技法であつた。かれ自身が、こうした論争——少なくとも表面上は、メロスの評議会場の「閉じられた扉」の背後でくり広げられた——をあくまで自分流に創作し、両立しがたい二つの原理の葛藤を何とか表明

しようとした点に、いささかの疑いも差し挟むことはできない。勇敢なメロスの人たちは、まもなく、こう見抜いたのだつた、アテナイ人たちは、みずからの政治的利益以外の尺度をまるで認めないのだから、かれらの「正義感」に訴えかけても意味をなさないと。かれらはだから、せつせとこう論証した、アテナイの人たちよ、みずからの優越的な力を用いるにしても、しかるべき節度は守ってもらいたい、その方が、いっそう理にも叶っているのだから、なぜなら、たとえアテナイであつても、いづれは相手の「人間的な品位の感覚」に訴えなくてはならない日が出てくる以上は・・・と。アテナイ人たちはしかし、こうした警告にいささかもひるまず、次のように説き示した、われわれの利益は、この小さな島の併合を命じて止まない、というのも世間は、小さな島を中立のままに放置したなら、それこそ、アテナイ帝国の弱さの証しにほかならない、と決まつて解釈するだろうからだ、と。かれらは、メロスの人たちの攻略など何ら関心がないのを十分に自覚し、ゆえに警告して、身分不相応にも英雄の役割（「中立」など引き受けてはならない、と宣言した。古えの騎士道的な慣例など、今日の帝国主義的政策にまるでそぐわなかつたからである。かれらは、メロスの人たちに忠告して、神をもスパルタ人をも闇雲に信じてはならない、と戒めた。神は——自然もたえず告げているように——いつも大部隊の側に与し、スパルタ人ですら、そうするのがみずからの益に反するなら、世に「恥ずべき」と称される行為もあえて避けなかつたからである。

トゥキュデデスの作品で、アテナイ人たちは、みずからの唱える「強者の正義」を自然法則で正当化し、神のイメージを、正義の守護者からあまねく地上的権威や力の映しに変形したが、これを介してかれは、アテナイの現実主義的政策に深みと妥当性を付与して、一つの哲学教義にまで高め上げた。アテナイ人たちが躍起になつて努めたのは、みずか

らの容赦ない政策と、宗教や道徳といった力の「相克」をなんとか解消することであった。かれらの脆弱な敵たちは、そうした力（＝宗教や道徳）に訴えたなら、かれらの横暴を阻止できるかもしれないと期待したからである。トゥキユデイスがここに紹介しているのは——論理的にその頂点にまで至り着いた、加えて、その擁護者にも十分に自覚された——アテナイの「力の政策」にほかならない。ここでの相克を詳説するべく選び取られた様式そのもの（＝論争）に目を向けるなら、この相克が、最終的な決着を迎えることはない、と分かるのではないだろうか。メロス島談義が模倣した「ソフィスト式論争」の強味は、なんとと言っても、問題の解決を見出すよりは、両陣営の言い分をできるだけ明瞭化する点に求められたからである。かれはここで、できるなら「道徳家」を装いたかつたかもしれないが、作品に一貫したかれの姿勢は、これを拒まないわけにはいかない。メロス島のエピソードで真に新しいのは、これ自体が「力こそは正義」という原理の最初の宣言であった点にちがいない。この原理は、初期のギリシア思想のあざかり知らないもので、前五世紀にはじめて唱道されたからである。強者の正義は、今や、一種の自然的正義ないし自然的法則という形で、現行の道徳規範——つまりはノモス的正義（ト・ノモー・ディカイオン）——に激しく対立した。このことが意味するのは、今や「力の原理」が、伝統的なノモスを捨て去るでもなく、かといって、これの優勢を認めるでもなく、あくまでもノモスから切り離されてひたすら別個に、みずからの法をきつちりと具えつつ、おのれの領域をしっかりと形造っている点にちがいない。トゥキユデイスは、前五世紀の国家観にこうした問題の潜む点を発見したが、これを論じるにあたって——密かにプラトンの哲学的姿勢を思い浮かべながら——敵対するギリシア国民には「善のイデア」といった基準を用いるだろう、などと期待してはならない。かれは、メロス島談義といった最高

の知的傑作でも「ソフィストの弟子」であるのを彷彿させたが、さらにまた、「ソフィストの二律背反理論を用いて歴史的事実を記述し、ためにそれは、大いなる緊張と葛藤を手に入れて、プラトンの「アポリア」をすべからく具体化したようにも思われる。

今や、戦争のさ中にアテナイの帝国主義的政策がたどった「実際の行程」に目を向けてみなくてはならない。とはいえ、そうした行程の変奏や変動をすべからく扱うには及ばない。選ばれてよいのは、この行程がみずからの頂点で迎えた危機、すなわち、前四一五年のシケリア遠征なのである。ここにいう「遠征」に触れたトゥキユデイスの箇所は、あえて断るまでもなく、あまねく語りの中でも最高傑作の誉れが高かつたが、それはまた、かれの政治的洞察のいかにあつたか、を物語るこの上ない実例でもあつた。かれの『戦史』の第一巻から、遠征は、その影を早くも覗かせていた。コルクキュラを手にする者はシケリアへの海路を征する、という力強いヒントに促されて、アテナイ人たちは、開戦に先立つて、強力なコルクキュラ艦隊との同盟を勧められていたからである。何艘かの船を用いたシケリアへの最初のアテナイ使節団は、それほど重要とも思われないが、これのすぐのち（前四二四年）、トゥキユデイスは、偉大なシユラクサの政治家ヘルモクラテスに、ゲラの会議で、さまざまなシケリア国家の喧々諤々とした論争を取り繕わせている。アテナイからの将来の攻撃に備えて、これらの国家をシユラクサの指導下にまとめ上げようとしたのである。提示されている議論は、のちにかれが、シケリア侵攻中にカマリナの地で提出した議論にほかならず、ゆえに当人が、前もって準備されたそのような資料を、シケリア遠征が終わったのち、遠征の説明をまとめる段にあとから加え入れたのは疑いを容れない。トゥキユデイスの考えるところ、シケリアの政治家で真に「先見の明」を具えていたのは、ひとりヘルモクラテスのみであつた。この人物は、

はるか以前から、迫りくる危機を警告していたが、それは、そのような危機の避けられない必然性を見抜いていたからにほかならない。かれはこう悟っていた、アテナイ人たちは、シケリアにみずからの戦力を投入しないわけにはいかなかった、だから——介入の口実はたとえシケリアの国家が与えたにせよ——かれらの侵攻を非難しても益はないのだ、と。このことは、アテナイの外部でさえ、生きた政治の立場から物事を考える習慣が、しつかり確立していたのを物語っているのではないだろうか。この人物は、シケリアへの冒険的企ての魅力を、アテナイの観点から眺めていたが、そもそもアテナイ人たちが、そうした発想を抱くまでにはなお多くが生じなくてはならなかった。

このような発想は、アテナイには意外なほど有利にはたらいだ。ニキアスの平和から数年にわたり、かなり真剣に取り上げられた。アテナイ人たちは、アルキダモス軍との戦闘で負ったダメージからほとんど回復していないのに、セリナスと交戦中のセゲスタから救援を乞われると、いさぎよく応諾した。これは、トゥキュデデスの紹介するあまねく逸話中でもとりわけ劇的なシーンといつてよい。すなわち、アテナイの集会の席上、アルキビアデスは、保守的な和平派のニキアスが言葉を尽くして諫めたにもかかわらず、シケリアの征服とギリシア全土の支配という途方もない自身の大計画を詳説し、アテナイのような大帝国の拡張は、とうてい「押さえられる」ものではない、と訴えた……。大帝国の持ち主は、これを維持しようとすれば、いつその拡張を目ざすほかはない、なぜなら、あらゆる休止は、崩壊の危険を意味するのだから、というわけである。トゥキュデデスが、われわれに思い出させようとしているのは、アテナイの力を間断なく拡張すべき必然性をめぐって、さらには、アテナイの気質に具わった、休みなく・恐れなく・限りのない楽観主義と冒険的企てをめぐって、戦争以前に語られたすべての事柄に

ほかならない。アルキビアデスは、このような民族性の輝かしい化身であった。この人物がなぜ、私生活における傲慢で横柄な振る舞いから激しい憎しみを買っていたにもかかわらず、これほど大衆を魅了し説得する力を具えていたのかは、これによって十分に解き明かされるにちがいない。ここにみる状況の奇妙な連鎖の中に、そしてまた、アテナイを導いて野心的な企てを安全に切り抜けさせることのできた唯一の指導者（Ⅱアルキビアデス）が、アテナイの人びとに激しく憎まれつつも大いに羨ましがられた人間であった、という事実の中に、トゥキュデデスがしつかりと目にしたのは、アテナイを没落に導いた主たる理由の一つにほかならない。というのもアテナイは、シケリアへの冒険を鼓舞して指揮を執った張本人（Ⅱアルキビアデス）が、遠征の開始から日も経ないのに、あえて追放に処されたとき、当の企てを成功の裡に終わらせる。望みを自分の方から打ち捨てたからである。かくして読者はこう実感した、アテナイの手で試みられた最大の企ては、艦隊と軍隊と將軍たちをことごとく失って国家の基盤を根底から揺るがせたから、たとえ最終的な破局に至らなかつたとはいえ、やはり「運命の逆転劇」と呼ばれてしかるべきなのだ、と。

シケリア遠征をめぐるトゥキュデデスの記述は、文字通りの「悲劇」と呼ばれてきた。けれどもそれは、ヘレニズム期の歴史と違って、確かにあえて、美的・情緒的效果を悲劇作品と競い合うこともなければ、読者の心に、強い同情と恐怖を掻き立てることもなく、だから、単にこう指摘しておくだけの方が、むしろ安全かもしれない。すなわち、トゥキュデデス自身は、かつて、大衆を大胆な企てに駆り立てる「ヒュブリス（傲り）」に言及したこともあったが、その際にイメージされていたのは、ここでの遠征のような冒険にほかならなかつた、と。もつともその時ですら、かれの関心はひたすら、事実の道徳的——ないし宗教的——局

面によりは、そこに含まれた政治的問題に振り向けられていた。トゥキュディデスは、シケリアでの大失敗を、アテナイの強大化に下された「神罰」であると考えていた、というのも当人は、権力が、それ自体において「悪」だなどと信じるどころから遙かに隔たっていたのだから——このように想像するのは、間違い以外の何ものでもない。かれの見解によれば、シケリア遠征は「罪」というよりも「過ち」に近かった。遠征の失敗は、あくまでも政治的な誤り——あるいはむしろ、そのような誤りの連鎖——に基づいていたからである。かれ自身は、政治哲学者として、大衆は常にヒュブリスに陥るのを免れがたい、より具体的には、しっかりとした事実を裏打ちされない幻想的計画をどうしても立てがちである、と考えていた。このような衝動を正しく導くのが、それゆえ、大衆指導者に課された義務なのである。シケリア遠征の惨めな結果にも、さらには、アテナイの嘗めた最終的な敗北にも、かれは、暗い歴史の必然の「見えざる手」など目にしなかった。ここでの「見えざる手」としてイメージされてよいのは、これら二つの大失敗を、誤った計算が招いた単なる結果——あるいは好機の奸計——と解するのではなく、むしろ、必然的な論理プロセスの果てと解釈するような「純歴史的推論」であろうか。ヘーゲルは、事が終わってから各種の失敗をしきりに指摘し、自分たちなら遙かに上手くやったであろうに……、と常に嘯くような「書齋の歴史家」の狭量と厚かましさを厳しく叱責したが、そのかれなら、きつとこう語ったにちがいない。ペロポネソス戦争におけるアテナイの敗北は、犯された個々の誤りによりは、まことに深い歴史的必然に基づいていた、というのもアルキビアデスの世代は、大衆にしても指導者にしても、度を越した極端な個人主義に強く支配され、精神的にも物質的にも、戦争の困難を乗り切ることができなかったからである、と。トゥキュディデスはしかし、いささか考えを異にしていた。かれは、あくま

でも政治家としてペロポネソス戦争を、知性そのものが解決すべき明確な問題とみなしたからである。これを解決するのに、アテナイは、とんでもない一連の誤りを犯したから、かれは今、はるかに高い批判的観点からこれを観察し、きつちりと診断を下した。かれの信じるどころ、誤りはすべからず、そもその出来事以後に認知され、そうならざるを得なかったから、これ自体を否定するのは、政治的経験を否定するに等しかった。かれの仕事は、一つの重要事実を介していつそう容易に理解されるだろう。ほかでもない、かれが基準として用いたのは、ただ単に「もつとよく知りたい」といった自身の気持ちでなく、アテナイを説得して戦争に手を染めさせた、しかも、この戦争を導いて勝利させたかもしれない——とトゥキュディデスが固く信じた——偉大な政治家、すなわち、ペリクレスその人だったのである。

トゥキュディデスは、ペロポネソス戦争の決着が、いがみ合う人びとをまとめ上げる指導者の手腕にほぼ完全に委ねられていて、それに比べて、陸軍と海軍の統率力如何などはるかに取るに足りない、と信じて疑わなかった。この点は、第二巻の有名な箇所にはつきりと示されているのではないだろうか。そこでは、戦争と疫病に打ちひしがれた国民を慰めて、さらなる抗戦へと励ますペリクレスの演説を紹介してのち、トゥキュディデスが、この偉大な政治家の履歴を、アテナイの人びとの指導者としてかれの後を継いだあまねく面々のそれに対比させていたからである。かれはこうまとめている、ペリクレスは、平時にも戦時にも、およそ頂点に位した間はアテナイを安全に保って、対立し合う両陣営の「中庸を図る」といった狭い線に沿って、この国を立派に導いたのだった、と。ペロポネソス同盟との戦争においてアテナイが直面していた課題を正しく捉えていたのは、ひとりペリクレスのみであった。大々的な冒険は差し控えて、海軍をこそ大切に、戦争中は帝国の拡張になど手を染

めず、国家に負担を掛けるような不必要な危険は冒さないこと——これが、かれの採った政策にほかならない。しかるにかれの後継者たちは、こうしたすべてと真逆の方向を實踐して憚らなかつた……、というのがトゥキュデイドスの酷評なのである。かれらは、個人的野心や私的貪欲に促されて多大の計画を練つたが、それらはすべて、戦争とはまるで関係のない、それでいて、もしも成功したなら本人に栄光をもたらし、逆に、失敗したなら国家の抗戦力を著しく弱めるにちがいない代物であつた。これは明らかに、アルキビアデスへの告発といつてよい。この人物は、シケリア遠征をめぐる論争で、ライバルであつた周到で清廉なニキアスから、まったく同じ仕方ですら評されていたからである。もつとも、ここでの論争が目ざしていたのは、正しい洞察と崇高な原理を手にするだけでは十分といえない、という辛口の事実を読者に分からせることで、だとすれば、トゥキュデイドスの手で温かい個人的共感をもつて描かれているニキアスは、まさしく、好ましい指導者であつたかもしれない。しかるに実際には、はるかに強い指導力を存分に發揮したのは、あるうことか、ニキアスよりもアルキビアデスの方であつた。この人物は、みずからの益にならないなら何事にも手を出さず、あまつさえ、アテナイを導いて大きな危険に招き入れたにもかかわらず、それでも「人びとをコントロール」できた。ちなみに、ここに引いた言葉はトゥキュデイドスが、これに続く箇所、内乱の恐れが濃かつたアテナイでその阻止に果たしたアルキビアデスの貢献を、大々的に褒め称えた折に漏らしたものにほかならない。

これと同じく、ペリクレスの性格を描写する際にも、トゥキュデイドスがわけても強調したのは、人びとに及ぼす多大な影響力と、人びとに導かれるよりは「人びとを導いてゆく」卓抜の能力であつた。この人物が、アルキビアデスや他の誰よりも優れていた所以のものに、金銭的に

ひたすら清廉であつた、という付帶的事実を挙げなくてはならない。これによつてかれは、大衆が耳にするのを好んだ事柄をサービス的に語るのではなく、紛うことのない真実を包み隠さずに口にする権威を手にしたからである。かれは絶えず、わが手に「手綱」を握りしめて放さなかつた。すなわち、大衆が反抗しはじめると、容赦なく脅して統制するのを躊躇わず、逆に、大衆が意気阻喪するや、しきりに励まして元氣づけたのだつた。ペリクレス治下のアテナイは、かくして「名目上は民主制でも、實質上は、卓越した人物による独裁制」であつた。ここにいう独裁制はしかし、この上ない政治能力を具えた第一級の人物による正銘の「アリストラティア（最優秀者支配制）」にほかならない。ペリクレスの死後、アテナイは、このような支配者を二度と手にすることはなかつた。かれの後を継いだ面々はすべからず、ひたすらかれの模倣に努めたが、ただの一人として、かれが手にしたような絶大な影響力は手にできず、しきりに大衆に媚び諂つてその情念に迎合した挙句、ようやく束の間、ささやかな影響力を行使できたにすぎない。トゥキュデイドスに従うなら、シケリア遠征が惨めに失敗したのは、人びとからの影響や大衆本能の類いをふるい落として、世にいう「民主的な体制」を打ち破り、専制君主のごとくに支配できる人間がどこにも見当たらなかつたからにはほかならない——もつともペリクレスなら、この遠征が、本人の防衛的戦略の真反対に位置した以上、あえて敢行すらしなかつたであろうが……

——。それというのも当時のアテナイの力は、もしも国内の党派嫉妬心が、輝かしい指導者（＝アルキビアデス）の地位を奪いさえしなかつたら、それ自体として、シユラクサを打ち破るに十分だつたからである——。この点において、アルキビアデスの推定はあくまでも正しなかつた——。シケリア戦争から手厳しいダメージを負つても、アテナイは、なおも十年以上に及んでその体制を維持したが、絶えざる意見の衝突を介

して弱体化し、とうとう抗戦を続けることができなくなった。トゥキュデイスが信じて疑わないところの核心は、多くの言葉で語られているが、つまるところ、ペリクレスの指導下でならアテナイは、ペロポネソス戦争にも容易に勝利できたであろうに……であつたといつてよい。

かれがここで、このように活き活きと浮かび上がったペリクレスの姿は、のちの政治家連中に比べると、大きな称賛に値する人物の肖像をはるかに超えていた。かれのライバルにしても後継者にしても、すべからず、生命を賭した戦いでアテナイを誤りなく導いていくべき同じ課題に直面したのに、十全に対処できたのは、ひとりペリクレスのみであつた。アッティカの喜劇作家たちは、ペリクレスの個人的特徴と思われたものを——少なくとも戯画化して——あれこれと描き出すのに腐心したが、トゥキュデイスはしかし、これに何らの関心も示さなかつた。かれの描くペリクレスは、政治的人物にふさわしい特色をもつばらに具えた、指導者や政治家がこぞつて範に仰ぐべき「鑑」にほかならない。このような事実の了解は、戦争の最終段階ではじめて可能となつたから、トゥキュデイスも、同じ仕方である——つまりは同様の経験を嘗めたのち——これを了解したのではなかつたか。ペリクレスの経歴の要約は、それゆえこの人物が、トゥキュデイスの作品から最終的に身を退いてのち為されていた。かれは、一定の距離を保つてペリクレスを眺め、おかげでわれわれも、この人物の偉大さを存分に認識できたが、ならば、かれの手で「ペリクレスのもの」とされている政策は、本当に、この人物の口からその通りに告げられたのだろうか、はたまたペリクレスが、アテナイの人たちに忠告して領土の拡張を思い留まらせたのは、紛うかたなきトゥキュデイスの創作であつたのか。それというのもかれは、この点に関するペリクレスの政策をよく知つていて、後継者たちが、逆方向の政策を実施して悪しき効果を招いたのも十分に目にしていたからな

のだが、こうした点の決定はあくまでも難しい。かれは、ペリクレスが、後継者たちの犯した過ちをいささかも「犯さなかつた」事実を指摘しながら、当人の政治的知恵をほぼ完璧にふり返つて記述しているが、これはしかし、戦争が終わつた後でなければ叶わないはずで、この点に疑問の余地はないはずである。それはしかも、この人物がいかなる金銭も懐に入れず、みずからの政治的地位から何らの益も引き出さなかつた、という、むしろ驚かれてよい「ペリクレス賛美」にも当てはまるのではないだろうか。トゥキュデイスは、戦争の勃発に際して当人を演壇に立たせ、こう口にさせていた、「いかなる併合も狙わないし、不必要な危険も犯さない！」と。けれども、この箇所ですら耳にされるのは、最終的な敗北をわが目で眺めた歴史家の「声」にちがいない。というのもペリクレスは、こう語つていたからである、「わたしは本当に怖れるのは、敵側の戦略などよりはるかに勝つて、われわれが犯す過失の方なのだ」と。トゥキュデイスは、ペリクレスの健全な外交政策が、つまるところ、アテナイの内政に占める当人の確固たる地位に根差していたのを的確に指摘しているが、その際に念頭に浮かんでいたのは、アルキビアデスの置かれた——これとは逆の——かなり不安定な立場であつたにちがいない。というのもかれは、外交の結果にひたすら準拠して内政そのものを査定したが、世の戦争を成功裡に押し進める上で途方もなく重要なのも、やはり「健全な内政」——ソロンの記述した古いタイプの——を措いてない、と固く了解していたからである。かれの目には、アルキビアデスが、アテナイ人たちを導いて海外での大戦果をほとんど手にしかけた矢先、かれらの手で無残にもその地位を剥奪され、ためにアテナイ自体が蒙ることになつた「致命的な結末」が忘れがたく焼き付いていたからにはほかならない。

ペリクレスという「政治家の導きの星」のこうした肖像には、トゥキュ

デイデスが、この人物の性格を描写した結びの部分でも目にできたが、その他の特徴なら、当人の演説中になつぷりと紹介されていた。最初の演説は、戦争の戦略面を詳説し、最後の演説は、きわめて切羽詰った事態を迎えてすら、なおも国民をコントロールして止まない指導者の姿を描き出していたが、双方の密接な繋がりとペリクレスの性格の要約から推測されてよいのは、ペリクレスの全体的肖像——演説も他のすべても含んだ——がこのような「まとめ」として造り上げられたのが、トゥキュディデスの歴史家としての経歴の後半であつた点にちがいない。ここにいう肖像は、実のところ、最も偉大な第三の演説としての、戦争の第一年目に斃れたアテナイ人たちを弔う「追悼演説」で全体的に目に見えるのである。

この追悼演説は、トゥキュディデスの他のいかなる演説にも勝つて、この歴史家がわけても自在に創作したもので、これまで、アテナイの過去の栄光に捧げられた当人の碑文にほかならない、と解釈されてきた。そして、過ぎ去つたものを純然と理想化する力を具えているのは、ひとり「死」のみである、とするなら、これはまさに「然り」といつてよい。戦いに散つたアテナイの兵士たちに捧げられたお定まりの送葬演説では、かれらの武勇をできるだけ輝かしく述べ上げるのが「通例」であつたが、トゥキュディデスはしかし、これをさらに踏み越えて、当の演説を介してアテナイという国全体をも煌びやかに理想化した。かれは、このような演説を口にする資格を、ペリクレス以外の誰にも許せなかつた。この人物を措いて、アテナイの精神を解説するにふさわしい崇高な知性と人格を兼備した政治家など、どこにも見当たらなかつたからである。トゥキュディデスの時代、早くも政治は、たえず出世を心掛けてひたすらに権力と成功を渴望する「出世主義者たち」の専門分野に成り下がつていた。ペリクレスが、クレオンを——ひいてはアルキビアデスをも

——大きく凌駕していたのは、トゥキュディデスの見たところ、まさに次の点にあつた。かれは、公的な国家と私的な人格の理想をしっかりと心に描いて、この理想が、かれの仕事のすべてにリアルな目標を与えていたからである。トゥキュディデスは、みずからの困難な仕事に見事なほど楽々と処していったが、その見事さは、とうてい十分に紹介できないだろう。かれは、堅苦しい雄弁術の定石などは打ち捨てて、当時の都市国家を記述するにあたり、そこに目にされた帝国主義的政策の堂々とした実践エネルギーをも、さらには、やはり目にされた精神的活力の名状しがたい多彩さをも、すべてを一つに溶かし合わせて「大いなる全一」に仕上げたからである。

トゥキュディデスのような人物なら、いつそう最近の都市国家の発展にも十二分に通じていたので、おのずと、社会構造のあまたの複雑さも見逃さなかつたであろうが、そうした構造はしかし、いつそう「単純度の大きな時代」に生み出されて、のちの時代にも褒め称えられた「政治的理想」——たとえばソロンの「エウノミア（よき秩序）」やクレイステネスの「イソノミア（権利の平等）」など——とまるで関わりを持たなかつた。かれが文字にする以前、新国家の本性を構成した「観念」を的確に表明する用語など、どこにも認められなかつた。かれはしかし、国家と国家の関係を思い描くにあたり、これを、敵対する原理がおのずから繰り広げる避けがたい「葛藤」として捉える姿勢に慣れ親しんでいたもので、同じ葛藤こそ、アテナイ社会の隠れた構造を支配する基本原理にほかならない、と気づいたのだつた。この点は、アテナイの体制の基本性格をめぐるかれの見解に、十分に例示されているにちがいない。「対立する原理の葛藤＝国家の基本性格」という発想は、かれの考えるところ、他のどこからも借り受けられないで、むしろ、他の国々がその模倣を心掛けるべき「正銘のオリジナル」であつた。この発想はそして、可能な

かぎり最善の体制は「混合体制」を措いてない、といったのちの哲学理論も先取りしていた。アテナイ民主制は、かれの見解によるなら、世にいう「算術的平等」——ある者（＝弱者）には「正義の最高形態」として崇拜され、ある者（＝強者）には「不正の極」として叱責された——というお定まりの理想を実現したものではない。この点は、かれの「ペリクレス評」からも十分に裏書きされるのではないだろうか。ペリクレスその人を、かれは、国家を現実に支配した「第一の市民」と呼んでいたからである。ペリクレス治下のアテナイは「名目の上での民主制」であった、というかれのコメントは、このような連関において、あの追悼演説で——この上ない人物の口を介して——見事に一般化されたといつてよい。アテナイでは、この人物も口にしたように、すべての人が「法の前で同等」であるにしても（＝デモクラシー）、政治的勢力の有無は「才能の優劣」に左右されないわけにはいかない（＝アリストクラシー（最優秀者支配制））。ここに論理的に仄めかされているのは、もしもある人が資格の点と重要度で衆に優れているなら、おのずと国家の支配者に任ぜられて構わない、という原理なのである。このような発想は、他方において、個々人の政治活動を介した共同体への貢献を促進するかもしれないが、同時に、次の事実も認めないわけにはいかない。すなわち、トゥキュデデスの作品において過激な扇動家のクレオンですら認めたところの、巨大で複雑な帝国を本当に統治しようとするれば、あまたの人びとが集まっただけでは無理なのだ、というあの事実である。トゥキュデデスはこう考えて憚らない、ペリクレス治下のアテナイが幸いにも解決していたのは、この人物が亡くなって一〇年間に及んだ完全な大衆支配でなくても先鋭化された問題、すなわち、すぐれた個人と政治共同体の「切っても切れない関係」という問題であった、と。

この問題を解決するには、国家を導くことのできる「天賦の才の持ち

主」の登場——民主制でもその他の国制でもきわめて稀な僥倖であった——を待つほかはなく、そうした指導者を欠く危険性は、民主制ですら免れることができない——これが、歴史の教えるところであった。にもかかわらずアテナイ民主制は、ペリクレスのような指導者にあまたの機会を与えて、個々の市民たちのエネルギー——その旺盛さを当人は言葉を尽くして褒め称えている——を組織化し、これらを用いた政治の巧みな操作も許したのだった。前四世紀の僭主制はすべからず、これによって打ち滅ぼされた。というのも僭主制は、ペリクレスの民主制がその指導者に与えた「モノ」を受け容れたくなかったもので、ここでの問題を、いかに足掻いても解決できなかったからである。ちなみに、独裁君主のディオニシオスは、シュラクサの市民たちを誘導して、この国の統治に協同して——つまりはペリクレスも助言したように、すべての個人が、みずからの生活を「私的な仕事」と「公的な義務」にきっちり区分するといった仕方——で——当たらせる、のに実際には成功しなかった。そのためには君主自身が、国家の生活に積極的な関心を抱いて、正銘の洞察を携えていなくてはならなかったからである。

いわゆる「ポリテイア（国制）」は、単なる「国の体制」のみならず、さらに加えて「その国の生活全体」をも意味した。生活そのものは「体制」に大きく条件づけられていたからである。アテナイの体制は、スパルタの紀律——市民の日々の生存まであまねく細目に及んで徹底して規制した——とはかなり異なっていたが、それでも国家の影響力は、すべてに行き渡る精神として、アテナイ人すべての生活に深く及んで止まらなかった。現代ギリシア語において「ポリテウマ（政治行為）」は「カルチャー（文化行為）」を意味したが、これはおそらく、古代における生活と政治の「固い連結」を物語る最後の名残にちがいない。ペリクレスの試みたアテナイ国制の記述は、そのためだろうか、私的生活と公的生活

の全内容をスッポリと蓋っていた。そこには、経済、道徳、文化、教育の各領域が余さずに盛り込まれていたからである。アテナイの国制を、こうした十全さと具体性をもって思い描く場合にのみ、トゥキュデデスの抱いた理想の国家像も、単なる「権力機械」でなく、豊かな色合いと形状とリアリティに溢れた「具体物」として理解されるのではないだろうか。このような像は、アテナイの国制というペリクレス自身の理想にその源を発していて、そうした「生きた中身」が無かつたら、かなり不完全であつたにちがいない。トゥキュデデスが口にする「権力」は、精神を欠いた機械的な貪りとしての、単なる「プレオネクシア（分捕り）」ではない。あまねく表情を具えたアテナイ精神を特徴づける「文学的で・芸術的で・哲学的で・道徳的な」といった注目すべき混合性格は、ペリクレスの国家観に再びその顔を覗かせている。かれが意識的に称賛しているのは、頑ななまでに共同して事に当たるスパルタの軍営風景と、個々の市民が経済的・知的な自由を存分に享受する、といったイオニアの生活原理の「統合」であつたからである。このような新しいタイプの国家を、トゥキュデデスは決して「静的なもの」とは、すなわち、初期の「エウノミア（よき秩序）」に偶像化された堅苦しい法的な建造物とは考えないで、体制面と経済面と精神面も考え合わせながら、これは、一種のヘラクレイトス的な「調和」にほかならないと考へた。すなわち、徹底した対立を避けがたいモノ同士が「緊張の均衡」によつて自身を維持している状態、というわけである。かれはだから、ペリクレスにこれを語らせて、対立し合うモノ同士——切り詰めた自活とこの世の所産の伸びやかな享受、辛苦と休養、仕事と祝日、精神と気風、思想と活力等々——が相互に作用を及ぼしつつ絶妙の均衡を保っている状態、と表現させたのだつた。

これこそは、アテナイ人たちを導いた偉大な政治家（＝ペリクレス）が、

バイデリア（そのⅧ）

まことに煌びやかな言葉を並べて詳説した「理想」にほかならない。これを介してかれは、アテナイ人たちが、まさにそれを守るべく戦つてきた「至上の価値」の何であるかを、際どい存亡の折に十分に自覚してもらつて、かれらを、わが故郷の熱烈な「愛国者」に仕向けようとしたのである。トゥキュデデスはしかし、ここにいる理想が、単にアテナイ人へのみ妥当するとは考えなかつた。かれの把握したアテナイは、政治的にも精神的にも、まさしく歴史的影響の中心点であつた。かれは、アテナイの及ぼす途方もない知的刺激が、単にアテナイばかりでなくギリシア世界の全体にまで広がっているのを、わが目でしかと捉えた。ゆえに、こう口にして憚らない、「要約するなら、わたしは、アテナイという都市全体を「ギリシア文化の学校（ヘラドス・バイデウシン）」と呼ぶことにしよう」と。アテナイの精神的主導権をこのように捉えたから——この把握はしかも、最大級のギリシアの歴史家に十分に値するものであつた——トゥキュデデスは、みずからの創造的洞察に訴えて、アッティカ文化が、途方もなく長大な歴史的影響を及ぼすにいたつた事実と、この事実が内包する諸問題をはじめ的確に捉えられたといつてよい。ギリシアの文化理想は、ペリクレスの時代に新たな幅と崇高さを手に入れていたが、これによつてさらに、能うるかぎり最高の歴史的生命と意味もしつかり手にしたのだつた。この理想には、アテナイ人たちがアテナイ国家が、みずからの知的・精神的な生活を通してその他の世界に及ぼした「崇高な影響」——これに導かれて他の国民も、アテナイ人と同じように生きかつ創造できるようになつた——が存分に表明されていた。バイデリアの理想こそは、アテナイの政治的野心が「まっとう」であつたのを、敗北の後にすらこの上なく弁明しているにちがいない。アテナイの精神は、みずからの不滅性の確信という「最高の慰め」を、これを介して見出し出したからである。

一四五

訳者あとがき

ここに紹介した和訳は、W・Jaeger, PAIDEIA — Die Formung des Griechischen Menschen の英訳として有名な G・Highet, PAIDEIA — the ideals of Greek culture —, Oxford, 1939 をテキストにしている。イエーガーを和訳する際に、独文特有の圧縮性と抽象性に本気で手こずっていたわたしは、この英訳の意識性と具体性にどれほど助けられたか分からない。ハイエットの英訳は、いわゆる訳本の域を超えて、それ自体が、見事に完結した一個の読み物であった。

大学における外書講読のテキストに、たまたまこれを選んだ経緯もあって、教室での講読に合わせて、あえて和訳をパソコンに入れてみたのだが、改めて読み返してみると、独文の原典訳とは違ったストーリー

の滑らかさが目に付いて、比較の意味でも、思い切って『紀要』に投稿することにした。

同じ中身ながら、著者が変われば、こうも全体が、様変わり、するものだろうか。訳文自体が原典を超えることは、まず見られないものの、双方がしかし、限りなく接近する事態ならあながち皆無ともいえないだろう。そうした数少ない例外の一つが、ハイエットの英訳にちがいない。

今回は、紙数の制約もあって、PAIDEIA (Book Two: The Mind of Athens (第二巻、アテナイの心性), Oxford University Press, 1971) から「6, Thucydides: Political Philosopher (第六章、トゥキユデイス: 政治哲学者としての)」のみを掲載してみた。

(本学文学部非常勤講師)